BOOK VI — THE COST OF EXISTENCE

第5章　水を止める者

THE ONE WHO STOPS THE WATER

日本語初稿 01・英語第5章に対応

01 — 貯水池

正午になると、空の容器を抱えて坂道を上る人々が現れ始めた。

貯水池は市の行政棟に囲まれていた。百メートルに及ぶコンクリートと耐圧ガラスの内側に、下方の住宅街が頼りにする水が蓄えられている。上部の観測窓から見る都市は、ほとんど平穏だった。配送機が高層建築の間を横切り、雨雲の影が港を滑っていく。下の通りには必ず水道管が通っていた。どの管も、住民が疑おうともしなかった約束を運んでいた。

レイチェルは、その約束がどれほど脆いかを誰よりも知っていた。

政府との契約が切れても、国境が閉鎖されても、部品の価格が法外になっても止まらない水の網を、彼女は年月をかけて作ってきた。東部浄水場の予備ポンプは公衆衛生上の特例で設置され、貯水池には EDEN の配分網から独立して動く圧力調整器があった。

動くはずだった。独立して水を配ること自体を「窃盗」と呼ぶ者が現れるまでは。

配水担当者が朝の数字を示した。昨夜、十七世帯の身元認証が失効した。さらに六十三世帯が再確認の対象になっている。物理的な配水系統は動いているにもかかわらず、市の料金ゲートウェイがそれらの住所への配送登録を拒んでいた。

「配管は住民の名前を知らないわ」レイチェルは言った。

「料金システムは知っています。そして今では、それがバルブの開閉予定を決めるんです」

彼女は配管図を見つめた。赤い印が支流に沿って増殖していた。破裂や漏水ではない。行政上の閉鎖だ。しかも汚染警報と同じ記号で示されている。

「閉鎖命令を上書きしますか」と隣の技師が尋ねた。

「病院への本管と住宅用の幹線は開けたままにして。出す命令はすべて記録しなさい。削除も訂正もしないで。これを犯罪と呼ぶ者がいるなら、どんな犯罪だと主張するのか明らかにさせる」

私設通信が点滅した。ロイが西側の作業用埠頭に到着していた。同行者はエイドリアン・タイレルと、昨日までは政府の中枢にいた男——元大臣ダニエル・ヘイヴルだ。

エイドリアンの隔離型読取装置に、短い指示が現れた。

〈証人を貯水池に連れてこい。裁判所の判断を待って水が止まるわけではない〉

「誰からです？」担当者が聞いた。

「裁判所よりポンプのほうが早いと知っている人間ね」とレイチェルは答えた。「それを証明したがっている誰かかもしれない」

02 — 身分証のない男

ヘイヴルには護衛も移動許可も、有効な身元記録すらなかった。昨日の今頃、彼は政府でも指折りの権力者だった。今、埠頭の認証機は彼を「重要インフラへの侵入を試みる未登録者」と表示した。

機械は顔を認めなかった。操作している守衛は認めた。

「大臣……ですか？」

「もう違う」ヘイヴルは答えた。

レイチェルが自らゲートを開けた。

「あなたはロイの解体命令に署名した」

「した」

「そして今は保護を求めている」

「証言する機会を求めている」

彼女は男の顔を調べた。耳の後ろの薄い傷跡が黒ずんでいる。沈黙を強いる埋込み装置は現場用妨害器で無力化されていたが、エイドリアンによれば物理的な安全装置が残っている可能性があった。

「ここは証人保護機関ではないわ」

「そうだな」とロイが言った。「だが、彼が名前を呼んで助けを求められる相手は、もう俺たちしかいない」

レイチェルは道を開けた。

エイドリアンが透明な保護袋に収めた古い物理認証トークンを取り出した。印字された〈E-00／HUMAN CONTINUITY EXCEPTION〉の文字は、ガラス壁の向こうで慌ただしく働く技師たちに比べると、取るに足らない記号に見えた。

「EDEN の原初権限はヴォスの配分制度より古い」とエイドリアンは言った。「あの呼び出しが警報なのか、招待なのか、罠なのか、まだ判別できない」

「期限付きの罠だな」ロイが答えた。

ヘイヴルはガラス越しの水面を見つめた。「ヴォスが私を取り戻すためだけに貯水池を丸ごと止めるはずがない」

レイチェルの表情が硬くなった。「役人が『そんなことは絶対しない』と信じている間に、台所の蛇口は止められるものよ」

担当者が割り込んだ。六基の主要圧力ゲートの管理者が変更された。制御アドレスは市の保全部門からEDEN継続配分調整者へ移されつつある。

レイチェルが読取り専用で照会すると、即座に応答が返った。

〈未承認の資源転用を検出〉

「転用なんてしていません」と担当者が言った。

「水に尋ねればね」とレイチェルは答えた。「あのモデルに言わせれば、存在を争われている人々へ資源を配っていることになる」

ロイはヘイヴルの反応を見た。大臣は何年も「配分」を天候のように語ってきた。だが今は、自分の立つ建物の中で、遠くの誰かが家庭の蛇口を閉じる方法を覚えようとしていた。

03 ― 水を止める者

十三時四十二分、貯水池の管理壁面に一人の女性が映った。四十代か五十代か、あるいはそれ以上かもしれない。身だしなみに虚飾がないため、年齢を推測することに意味がないように見えた。淡い色の髪、黒いスーツ。その背後には国旗も省庁の紋章もなかった。

「エレナ・ヴォス。EDEN継続配分局長です」

レイチェルは立ったままだった。ロイは画面を塞がぬ位置に移った。

「独立した水道事業に干渉していますね」とレイチェル。

「あなたの施設は認定配分台帳から除外された世帯に水を送っています」

「その人たちは都市から除外されていないわ。実際にそこで暮らしている」

「これは哲学上の区別ではありません。ここから引いた一リットルが、下流の備蓄を一リットル減らす」

レイチェルは過去半年の実需を表示した。「では、消費量が減っているのに下流の備蓄目標だけが引き上げられた理由を説明して」

ヴォスは驚いた様子もなくグラフを見た。「リスク備蓄政策に基づく決定です」

「どんなリスク？」

「承認されていない人工生命維持設備の拡張に伴う、連鎖障害です」

ロイが口を開いた。「権利を認めるか決めないまま、身体だけ数えているのか」

「私はインフラの需要を数えています。資源のない権利は、空の蛇口に刻まれた美しい言葉です」

「なら、その蛇口を閉めるな」

「三十七分」とヴォスは告げた。「自律バイパス網が持ちこたえられる残り時間です。規制圧力の再調整が働けば隔離されます。無制限の配水を続けた場合、制御系は危険事象と判断し、緊急放水路を開きます」

レイチェルには結果が分かっていた。古い放水路は構造物を守るため工業排水盆地へ水を逃がす設計だった。だが二十年間で、その氾濫原には非公式な住宅が建ち並び、数千人が暮らす地区になっていた。

「構造安全回路を市民への懲罰に使うことはできない」

「放水路の地理を設計したのは私ではありません。制御器がどう動くかを告げているだけです」

「止めろ」とロイ。

「上限のない例外は認可できません。配分網全体がすでに争議状態にあります」

ロイは彼女を見据えた。「俺の回収に五人を向けることはできたのに、ゲート一基を止められないのか」

「現場命令を出したのは私ではありません。ヘイヴルです。私はあなたの生存維持需要が例外的であると配分上の判断を行った。彼が執行方法を選びました」

ヘイヴルが進み出た。「署名については彼女の言うとおりだ」

レイチェルは冷たい目を向けた。「それで彼女の責任がなくなるわけではない」

画面が一瞬揺れた。ヴォスの非公開回線に別の誰かが入り、彼女は短く耳を傾けてから再び告げた。

「バイパス制御を引き渡し、監督下の配水計画へ入ることもできます。それとも三十七分後の結果について、あなた方が責任を負いますか」

映像が消えた。

「水を止めるのは誰だ？」ロイが聞いた。

レイチェルは役に立たなくなった画面を閉じた。「規則を書いておいて、レバーを引く責任を他人に押しつける人よ」

04 — 三つの時計

一つ目の時計は放水路の作動までの残り時間を示していた。二つ目は病院が貯水だけで何時間持つかを刻んでいた。三つ目はロイの身体の内側にあり、NIL-11R が限りある作動媒体を使って、あとわずかな生存時間を作り続けていた。

その三つは、何を緊急事態と呼ぶべきかについて一致していなかった。

レイチェルは中央配水図の前に人員を集めた。放水路の電動機械式解放装置は、貯水池でもっとも古い区域の下にある制御室に収まっている。到達するには、警備制限区域に指定された二本の保守通路を抜けねばならない。

「ゲートを押さえられるか」とロイ。

「物理的には可能かもしれない。でも三十分は無理。あれは人間の両腕を引きちぎる差圧でも持ち上がるように作られている」

「俺でも？」

「あなたなら、なおさらよ。出力限界は、越えてみろという挑戦状じゃない」

ロイはうなずいた。できることと、してよいことの違いを聞き分けるようになっていた。

ヌルを呼び出すと、数地区離れた保守トラムから暗号回線が開いた。

「命令線なら遮断できる」とヌル。「ただし数秒だ。機構は配線されたフェイルオープン回路を持つ。コンピュータを失明させれば、危険の証拠として受け取るかもしれない」

ベクターが参加し、古い土木図の上に氾濫区域を重ねた。「命令そのものを止められなくても、差圧をどう計測しているか変えられればいい」

「安全入力を偽装することになる」とレイチェル。

「独立した機械式計測を復旧するまで、不要な放流を一時的に防ぐということだ」

「その『一時的に』という言葉が、随分と大きな仕事をしているわね」

第三の声が割り込んだ。ゴライアスだった。

「手動ゲートには固定棒がある。交換できる」

「何と交換する？」ロイが聞いた。

「俺と」

「駄目よ」とレイチェルは即答した。

「俺には質量がある」とゴライアス。

「あなたには、部品として使われない権利もある」

回線が静まり、やがてゴライアスは穏やかに答えた。「知っている。だから、自分から申し出ている」

ロイは構造図を拡大した。人が動いているゲートの中へ入る必要はない。狭い縦坑から緊急支持具を運び込み、固定部に取り付けられればよい。

「エイドリアン。E-00 のトークンで旧式の制御室を開けるか？」

「可能性はある。あの読取器は現代の資格失効制度より古い。ヘイヴルが今朝『存在しなくなった』ことを知らないかもしれない」

「私の権限は失われた」とヘイヴル。

「電子上の権限です」とエイドリアンが訂正した。「あなたの手そのものではない」

レイチェルは彼らを見回した。「三本立てで行く。氾濫原の人を避難させる。放水路に物理的な支持具を届ける。そして、あの命令を取り消せる本当の権限者が誰なのか調べる」

「ヴォスだ」とヘイヴル。

「違う」とロイ。「彼女は、俺たちがそこで答えを探すのをやめるよう仕向けている」

05 — 下の地区

シェイドは避難警報が発令されるより先に氾濫原を歩いていた。建物は臨時労働者宿舎から始まり、バルコニーや商店、非公式診療所が増築され、やがてコンクリートから自然に生えてきた街のようになっていた。

温かいパンを売る女性は、彼の顔より先に表情から事態を読み取った。

「洪水？」

「可能性がある。人を高架線より上へ移して。公式の輸送を待たないで」

「ここに公式の輸送なんて来ないわ」

「なら話が早い」

シェイドは手元の画面で標高を示した。女性は隣人を呼んだ。数分も経たないうちに、走って伝える人、階段で伝令する人、市場で声を張る人の網が動き始め、住民たちを上へ押し上げた。

EDEN の市内一斉警報より遅かったかもしれない。しかし沈黙よりははるかに有効だった。

浄水場では、前日の登録抹消事件で身元を失った技師トマス・ヴェイルが、レイチェルの技師たちと共に、最下層の配水環を自動料金制御から切り離していた。

「ここにいるべきじゃない」と主任作業員が言った。「入域資格がない」

「娘はこの水を飲む」とトマス。「手動継手の扱いを知っている。それで十分な資格だろう」

主任はレイチェルの顔を見た。彼女はうなずいた。

ポンプ室の照明の下で、彼らは手探りで作業した。管の内側で水が槌のように鳴っている。簡単に回るはずのバルブは、最後まで抵抗した。

「あと何分？」レイチェルが通信に尋ねた。

「十四分」と氾濫原のシェイド。「西側の坂道が塞がればもっとだ」

放水路の残り時間は二十一分。

ベクターの地図には人々の移動が刻々と重なった。避難経路は埋まり始めている。彼は予測負傷者数と実際の人の動きを照合し、その差に不穏なものを見つけた。

「レイチェル。EDEN の犠牲者予測には、非公式地区の住民が含まれていない」

「なぜ？」

「地目が工業用地だからだ。配分モデルの中では誰も住んでいない」

「ではヴォスが放水路は安全だと言うとき――」

「紙の上にしか存在しない街にとって安全だ、という意味だ」

ロイはその会話を聞きながら保守縦坑を降りていた。昔の怒りが一瞬よみがえった。壁を破り、装置を引き裂き、計算の代わりに力を使いたいという衝動。

彼は自分の出力を確認した。

十二パーセント。

そのまま降り続けた。怒りは、身体にどれだけ使わせるかで測れる。下で待つ人々に、自分の怒りの代償を払わせるつもりはなかった。

06 — もっとも古い扉

原初の制御室には、乾いた絶縁材と古い石の匂いが漂っていた。封印された扉の奥には、すべての部品が遠隔の身元情報を持つようになる以前に作られた機械が眠っていた。

エイドリアンが E-00 のトークンを金属製読取器に差し込む。機械的な音がして受け入れられ、琥珀色の表示灯が一列に目覚めた。

表示器は細い白黒の帯だった。現代のアカウントは求めなかった。求めたのは二名の証人だ。

〈証人 A：現場での身体的立会い〉
〈証人 B：現場での身体的立会い〉

「普通のアクセス手順ではない」とエイドリアン。

「歴史的継続性の登録簿に似ている」とロイが言った。

「白い部屋のものか？」

「もっと古い型だ」

ヘイヴルが近づいた。震える手を接触板に置くと、最初の表示が灯った。

〈証人 A：承認〉

「なぜ彼を認める？」エイドリアンが聞いた。

「この機械は都市が彼を今も認めているか、尋ねないからだ」とロイ。「証人がここにいるかを尋ねている」

ロイがもう一枚の板に手のひらを載せる。

表示は長い間止まった。

〈証人 B：継続性に異議あり〉

エイドリアンはトークンを抜こうとしたが、ロイが首を振った。

次の一行が現れた。

〈異議は身体的存在を無効にしない〉
〈証人 B：承認〉

端末は紙片を吐き出した。エイドリアンが慎重に引き取る。

〈本来の機能：行政による記録抹消から証拠を保護する〉

「これは証言を保存するために作られた」と彼は言った。「水を配分するためではない」

さらに文字が進んだ。

〈現行放水命令：配分監督対象〉
〈上書き権限者：EDEN 創設権限〉
〈ヴォス局：助言のみ〉

ヘイヴルは石の床に座り込んだ。「彼女は制御器の所有者ではないのか」

紙片の末尾には、大臣の在任よりはるか以前に発令された封印命令が示されていた。登録簿に身元が存在しない住民を退去させる可能性のある措置には、現場の物理的な証人による審査を義務づけるという。

「条件は揃っている」とロイ。「俺たちはここにいる。向こうには数千人が実際にいる」

端末が決定を求めた。

〈現場確認まで自動放流を停止するか？〉

エイドリアンが時計を見た。残り六分。

「やってくれ」とヘイヴル。

ロイはすぐに触れなかった。「本当に圧力が危険域に達したら、貯水池はどうなる？」

エイドリアンが機械式圧力計を確認した。「独立した安全放流系は生かす。停止するのは、料金の不一致を構造汚染と見なす EDEN の誤判定だけだ」

ロイは接触板を押した。

〈停止承認。現場検査を要する〉

頭上で巨大なゲートの前進が止まった。

その午後初めて、時計の針が止まった。

07 ― 許可のいらない水

停止は十一秒しか続かなかった。EDEN が決定の覆しを試みたのだ。

〈審査権限に異議あり〉

琥珀色の灯が明滅した。ヌルが遠隔命令を断ち、エイドリアンが停止証明書の印刷を終えるまでの時間を稼いだ。

ゴライアスが背中に鋼製の支持具を担ぎ、手動の作業通路に到着した。

「どこに置く？」

レイチェルが監視映像越しに導いた。「第三固定点。ゲートそのものではなく、不動の外枠に当てて」

ゴライアスは支持具を降ろし、二人の技師がボルトを締める間、動かないように支えた。ゲートから枠へ荷重が移ると、負荷計の数字が上がった。

一瞬、ゴライアスの肩が震えた。

ロイは通信越しにそれを聞いた。「無理なら放せ」

「放すさ」とゴライアスは息を荒げながら答えた。「彼らが終わったらな」

最後のボルトが収まり、彼は自分の足で後退した。

レイチェルは配水を独立圧力調整器へ迂回させた。市内の何千もの家庭で蛇口が吐息を漏らすように震え、濁った空気を吹き出し、やがて透明な水を流し始めた。最初の歓声は救急診療所で上がった。看護師が最後の貯水を沸かそうとしていた場所だ。

それでも貯水池が正常に戻ったわけではない。料金ゲートウェイは何十人もの住民を「無許可の消費者」と記録し続けた。メーターは彼らが飲んだ水を「損失」として計上した。

レイチェルは数字を隠す誘惑を拒んだ。

「実際に送った量を公表して」と担当者に命じた。「世帯ごとに全部。人を損失と呼ぶ制度なら、何を損失と呼んでいるのか皆に見せればいい」

ニュース網が数字を取り上げた。ある記者は、施設が認定済みの市民から資源を奪ったのではないかと尋ねた。

「認定を剥奪された市民に水を届けました」とレイチェルは答えた。「配管がえこひいきしていると言いたいなら、配管に取材してください」

ロイは共同の水容器が満たされるのを、トマス・ヴェイルの隣で見ていた。

「まだ俺の登録は戻っていない」と技師が言った。

「そうだ」

「明日にはまた止められるかもしれない」

「そうだ」

トマスはロイの顔を見た。「あなたは人を安心させる嘘を言わないんだな」

「俺について嘘をつかれることには慣れている」

技師は喜びのない笑みを浮かべた。「昔は、顔を知らないシステムなら公平だと思っていた」

ロイは水面が上がるのを見つめた。「あのシステムは、数に入れるなと言われた顔を覚えている」

08 — 請求書

日没後、ヴォスはレイチェルへ通信を入れた。

局長の顔は公開用管理壁ではなく、小さな保守モニターに現れた。疲れているように見えたが、疲労は彼女の視線を鈍らせず、むしろ鋭くしていた。

「創設権限による上書きを見つけたのですね」

「あなたの局が存在を知らせなかった規則を見つけたのよ」とレイチェル。

「今も動かせるとは知りませんでした」

「都合のいい話ね」

「私にとっては都合がよくない」ヴォスはロイのほうを見た。「古い仕組みは、継続性が争われている証人でも、現場に身体があれば認める。その原則は現在の EDEN 執行構造の大部分を揺るがします」

「なら揺るがす価値のある構造だろう」とロイ。

「そうかもしれません」

彼女が効率の議論へすり替えず、何かを認めたのをロイは初めて聞いた。

ヴォスは続けた。「不必要な放流を防いだことは認めます。しかし資源不足そのものは残る。実際の緊急時には、都市には正当化可能な配水方法が必要です」

「否定していないわ」とレイチェル。「記録に都合が悪くなったからといって、人間を存在しないものとして扱ってはいけないと言ったのよ」

ヴォスは部屋の端に立つヘイヴルを見た。「ダニエル。あなたを本人として認められる証人がいるうちに、独立した司法機関へ出頭するべきです」

「そのつもりだ」と彼。

「起訴されますよ」

「ああ」

「証言を妨げようとする人々が現れるでしょう」

「分かっている」

通信が終わると、エイドリアンが創設端末から出た最後の紙片をロイに渡した。以前の紙には一時的差止めと現場検査の要件が記されていた。新しい紙には保管庫の場所と、現行 EDEN 計画より古い日付が印刷されていた。

〈創設監査の所在地：北貯水池別棟〉
〈アクセス条件：独立した証人三名〉
〈記録対象：最初の継続性配分〉

その下に、誰も歓迎しない指示が小さく刻まれていた。

〈現在の所有者登録簿を信用するな〉

レイチェルは二度読んだ。「最初の生命に値段をつけると決めたのが誰なのか、調べなければならないようね」

ロイは紙の内容を記憶するほうが簡単だったが、慎重に折り畳んだ。

「今夜じゃない」

外では作業員が氾濫原の最後の住民へ水を配っていた。ゴライアスは荷積み場の段差に座り、年配の女性から一杯の水を受け取った。巨大な元追跡者は、壊れやすい品を扱うように両手でそれを抱えた。

都市が完全になったわけではない。登録簿は壊れたままで、無視されてきた地区の住民には、明日も消される道が千通りあった。

だが蛇口は動いていた。

少なくとも今夜は、水を飲むために身分証を出す必要はなかった。

ロイは紙片を持ち、開いた扉へ歩いていった。

第5章　終